

# チベット語訳『妙法蓮華註』 「法師品」和訳

望 月 海 慧

## はじめに

本稿は、身延山大学東洋文化研究所の法華経研究班による研究成果の一部であり、先行する「チベット語訳『妙法蓮華註』和訳」に続くものである<sup>(1)</sup>。今回は第10章「法師品」の和訳を提示する。先行する「授記品」から「授学無学人記品」にわたって4大声聞、500人の比丘、2000人の比丘への授記がテーマとなっていたのに対して、本章から『法華経』は新たなテーマで展開する。それ故に、本論の序文において『法華経』の構成について再び論じられており、ここにおいて改めて本章以前の内容と以後の内容が簡略にまとめられている。すなわち「方便品」から「授学無学人記品」までには一乗と声聞授記が説かれ、本章以後の19章では劣根の者の信解のために経典受持の功德が説かれるとし、また、その受持の力を説いたのが「法師品」「安楽行品」「勸持品」であり、この「法師品」は所取・能取と、人・法が説かれるとする。これは明らかに瑜伽行唯識派の教義を意識したものであるが、本章のチベット語訳ではそのことについては論じられない。

## 1. 『妙法蓮華註』「法師品」の構成

和訳を提示する前に、各章の全体の構成を提示しておく。本章も先行する章と同様に、「理由」「名称」「疑惑の除去」による章題の解説の後に、本文が解説される。経文の解説にタイトルを付すと、次のようになる。

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| [ 1 ] 仏在世時の法師        | [ 2 ] 仏不在時の法師   |
| [ 3 ] 明らかな行          | [ 4 ] 世間に生まれること |
| [ 5 ] 功德の賞讃          | [ 6 ] 悲心        |
| [ 7 ] 法師への尊敬         | [ 8 ] 法師を誇る罪過   |
| [ 9 ] 妙法の莊嚴          | [10] 薬王に与える理由   |
| [11] 法師の功德           | [12] 法師の殊勝      |
| [13] 供養と尊敬           | [14] 受持の福德      |
| [15] 罪過と善の殊勝         | [16] 福德の殊勝      |
| [17] 法を聞く福德と内外の供養の殊勝 | [18] 法の特異性      |

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| [19] 法師そのもの       | [20] 世尊がいる場合        |
| [21] 法を説くものの功德の成立 | [22] 法身と舍利供養に相応しいもの |
| [23] 法師の功德        | [24] 行を励む理由         |
| [25] 譬喩           | [26] 譬喩の意味          |
| [27] 理由           | [28] 問い             |
| [29] 解説           | [30] 実際の説法          |
| [31] まとめ          | [32] 如来の守護          |
| [33] 信解し難いこと      | [34] 法身舍利への恭敬       |
| [35] 譬喩と意味        | [36] 法を解説する在り方      |
| [37] 如来の随順        |                     |

## 2. チベット語訳テキストの和訳

これ以後については「法師品」を示しており、この章の理由と、名称と、疑惑の除去である。<sup>(2)</sup>

理由は、この經典は、最初に「序品」が説かれ、その次に8章により教えそのものが説かれ、教えは一乗を方便と種々なる譬喩により示し、二乗と不定種姓のために説かれ、授記することである。それ以後の19章により受持を示しており、この經典は、広大で甚深であり、劣った根の者たちは信解し難いので、この經典が他のものと異なり賞讃され、受持のたくさんの功德が解説される。また、受持の意味を示すので、まとめて「受持」と名付けられ、この經典の教義を示す19章があり、12により一乗の行境を示し、前の8章により未了義と了義が区別され、3種の根に次第に授記することを示し、その次の4章により法と人の両者の功德を示すので、これも受持することにまとめられ、またこの經典の解説より、7種の譬喩と、3種の平等と、10の無上を示しており、ここの第10で無上の特別な力を示している。力にも2種があり、法の力と行の力である。法の力も5種で、理解と、信解と、中断と、法性の獲得と、読誦・受持である。行の力も7種で、受持と、法の解説と、難行と、衆生の教化と、衆生の苦を取り出すことと、特殊な功德と、法を唱えることである。受持の力を3章がまとめ、「法師品」と「安楽行品」と「勸持品」である。この章の中に、所取と能取と、人と法の両者を説く。<sup>(3)</sup>

名称については、「法師」とは、法を唱え、聖教を説くその人が法師なので「法師品」である。<sup>(4)</sup>

疑惑の除去は、「法師」と言うこれは、仏が世間にいる時と、いない時の何れかの時に「法師」と名付けられ、そのどちらも法師であるけれども、仏が世間にいる時には、弟子のところにいるので「八衆」と名付けられるが、世尊が涅槃の後に「その法師が法を説く」と設定されている。「この章に中にも授記が出ているのならば、『授記品』と何故に名付けないのか」と言うのならば、主要部分から切り取ったものなので名付けられない。<sup>(5)</sup>

[1] 経に、「それから世尊は」と言うものから「菩提を授記する」と言うまでには、この章<sup>(6)</sup>

も長行と偈頌の二つに分けられる。法師も二種で、仏が世間にいる時の法師と、いない時の法師の両者より、これは最初である。薬王が過去時にこの經典を保持していたので「薬王」とは特別に分けて、お言葉を授けている。「十法行を讃嘆する」と言うのは随喜である。随喜の1偈により「無上の大菩提の基礎となっている」と言われる<sup>(7)</sup>。

[2] 経に、「薬王よ、誰かある者が」と言うものから「菩提を授記する」と言うまでには<sup>(8)</sup>、仏が明らかにおられない法師の功德を説いており、それも随喜と、明らかな行の二種のうち、これは最初のものである。随喜のみによっても、この如くならば、明らかな行は言いまでもない<sup>(9)</sup>。

[3] 経に、「薬王よ、善男子や善男子は」と言うものから「合掌することで供養をなす」と言うまでには<sup>(10)</sup>、これにより法を明らかに示すことを示しており、ここに六法行を示しており、中と終わりを分けてから、十法行を示している。この6種に、受持と読と誦と信解と書写と供養である。供養は、内外の供養である。その法行を世尊が明らかに見たのと同じように、信と尊敬の行為が起こされている<sup>(11)</sup>。

[4] 経に、「薬王よ、誰かある善男子と善女人」と言うものから「世間に生じる」と言うまでのこれは<sup>(12)</sup>、悲心と誓願の力によりそこに生まれ、正しい原因により世間に生まれることである<sup>(13)</sup>。

[5] 経に、「それは何故か、と言うのならば」と言うものから「敬礼し、尊敬することは言うまでもない」と言うまでには<sup>(14)</sup>、以前に人の功德を賞讃し、尊敬するに相応しく、功德が大きいので悲心と誓願によりここに生じ、大きな利益をなすことである<sup>(15)</sup>。

[6] 経に、「薬王よ」と言うものから「生まれると知るべきである」と言うまでには<sup>(16)</sup>、大きな功德をもつことで、悲心がここに生じると説かれており、この法を説くことも正しいことであると説かれており、二乗から分けられるから「菩薩摩訶薩」と言われ、広大な仏国土に生じなくても、悲心により衆生に利益をもたらすので、天と上の二界に生まれずに、ここに生まれることを示している。不顛倒の菩薩が法を信解する印については、法を聞くだけで声と歡喜と痛苦により涙が生じることが菩薩の印である<sup>(18)</sup>。

[7] 経に、「薬王よ、善男子や」と言うものから「如来により生まれることを知るべきである」と言うまでには<sup>(19)</sup>、6種の法師を尊敬し、尊重すべきことが説かれており、尊敬すべきことについて、説者は仏の使者のように見られる。謗ることは如来を損なうので大きな罪過と説かれ、読誦が如来を莊嚴により飾るように、おられる場所が供養し、敬礼すべき場所と説かれており、4種の供養により供養すべきである。「使者」とは、如来の意図に相応し、「生じる」とは言葉に相応し、「なすべきことをなす」とは身体の行為に相応するので如来の一切の所作をなすことである<sup>(20)</sup>。

[8] 経に、「また薬王よ、誰かいずれかの衆生」と言うものから「とても悪いと解説される」

と言うまでには、法師を謗ることは大きな罪過であると解説しており、彼が世尊に対して悪心により謗ることは2種の利益の行を損なうことにならないのは、世尊に混乱はないからである。法師を謗ることで二つの利益の行を損ない、混乱が生じるから。また仏を謗ることにより慈愛を嫌う心は意図されず、衆生を捨てないが、法師はその如くではない。仏が世間にいる時に、根が堅固な衆生がある者を謗ることがあっても、他者の心が移ることにならないが、現在の法師を謗ることで他者の心を退けるので、自分と両者を損なっている。経にも、菩薩の混乱した心は一切衆生の法の顕現を妨げるので、五無間をなすことでこの罪は大きいと解説される。「菩提の混乱した心」と言うものも仏の法を滅するものである<sup>(22)</sup>。

[9] 経に、「『それは何故にか』と言え、薬王よ」と言うものから「如来を肩に担っている」と言うまでには<sup>(23)</sup>、この妙法を唱えることはすべての功德の莊嚴で飾られているので、『入法界品』<sup>(24)</sup>より、菩薩の10種の莊嚴により飾られるか、如来の一切の莊嚴により飾られる<sup>(25)</sup>。

[10] 経に、「彼はどこに行ってもそこで」と言うものから「完全に円満になる」と言うまでには<sup>(26)</sup>、この妙法は甚深なので聖アーナンダには与えられないが、薬王菩薩などには与えることも、例えば大薬により毒を薬に変えるように、薬を知らなければあり得ない。そのようにこの法は菩薩に与えるに相応しいが、声聞らに対するのではない。菩薩は聞のみにより究極に至るようになり、自と他の利益を成立させるようになるから<sup>(27)</sup>。

[11] 経に、「それから世尊はその時に」と言うものから「受持し、尊重すべきである」と言うまでには<sup>(28)</sup>、これ以後の16偈を3種に区別し、最初の2偈により法師の功德と供養に値することを説き、13偈により法師の功德そのものを説き、1偈により特別な法をまとめたものが説かれている。その最初の偈にも2種あり、1偈により自然に成立する知恵の獲得が説かれており、真実の知恵と空性の知恵である。その次は、真実の知恵の特徴を示しており、一切種智と後得智と根本智である。「誰であれこの経を受持し、供養し、尊重すれば、それらの知恵を獲得することに疑惑はない」と合わせられる<sup>(29)</sup>。

[12] 経に、「世間主の誕生で」と言うものから「この無上の經典」と言うまでには<sup>(30)</sup>、13偈により法師の功德を説き、そこでも3偈で法師の殊勝が説かれ、10偈により尊重と尊敬をなすことが説かれ、最初の3偈により如来による賞讃とよい生まれが説かれ、誓願の力により生まれることが説かれている<sup>(31)</sup>。

[13] 経に、「幻術の花を奉仕すべきである」と言うものから「その法師に宝を降らす」と言うまでには<sup>(32)</sup>、10偈により供養と尊敬をなすことが説かれており、それにも4偈で法師に給仕し奉仕すべきことが説かれ、後の6偈で福德の殊勝が説かれており、尊敬が生じることが説かれている。最初の4偈についても、最初の1偈で法師そのものが説かれ、次の3偈により受持が説かれ、これが最初である。その法師は正しい結果を得るから<sup>(33)</sup>。

[14] 経に、「それらは常に合掌して」と言うものから「如来のなすべきことをなす」と言う

までには、これにより受持する大きな福德が説かれており、尊敬と供養と、お言葉を聞くことと、読・誦することである<sup>(35)</sup>。

[15] 経に、「相応しくないものが生じれば、私はそれを捨てる」と言うものから「その罪過はとても多いと解説する」と言うまでには、<sup>(36)</sup> 2偈により罪過の殊勝が説かれており、<sup>(37)</sup> 4偈により善の殊勝が説かれている。

[16] 経に、「ある人が私を明らかに賞讃して」と言うものから「そこで広大な福德を得る」と言うまでには、<sup>(38)</sup> 福德の殊勝が説かれている。<sup>(39)</sup>

[17] 経に、「歓喜が生じ、私を賞讃する」と言うものから「その大きな不思議により得るであろう」と言うまでには、<sup>(40)</sup> 法を聞く福德と、内外の2種の供養の殊勝が説かれている。<sup>(41)</sup>

[18] 経に、「薬王よ、あなたは信じるべきである」と言うものから「解説されるべきである」と言うまでには、<sup>(42)</sup> この法が特別なものと説かれている。<sup>(43)</sup>

[19] 経に、「薬王よ、これらの法門」と言うものから「信じないであろう」と言うまでには、<sup>(44)</sup> 法師自身を示しており、先に長行で説かれており、後で偈にまとめられている。長行には、法を理解し難いことと、現れる場所で塔になったものを説いたものと、衆会の在り方を説いたものである。<sup>(45)</sup>

[20] 経に、「薬王よ、これは」と言うものから「何を言おうか」と言うまでには、<sup>(46)</sup> 世尊がおられる場合も説かれており、普く説いたのではなく、理解し難いので、未来時に根を理解していない者たちに説くならば、損減するので、説かないことを説いたのである。<sup>(47)</sup>

[21] 経に、「このように薬王よ」と言うものから「如来の手でなでられるようになる」と言うまでには、<sup>(48)</sup> この法の力で説く人は功德をもつようになることが説かれており、如来の服は、忍と、寂静と、柔和と、慈愛と、悲心をともない、恥と避けるべきものは捨てられ、その服により覆われており、根が熟するので、如来が気にかけて、護るようになり、信解が大きくなり、力強い誓願と信の自性をもつものになり、善根をもつようになり、空性と悲心の殊勝が世尊と同じく入り、如来の手でなでられ、場所を変えて授記を得る。<sup>(49)</sup>

[22] 経に、「薬王よ」と言うものから「供養すべきである」と言うまでには、<sup>(50)</sup> 法身と舍利供養に相応しいものが説かれており、そのうち最初の法身と舍利が説かれ、これに依り法師は功德をもつものとなることが説かれている。その法と舍利供養に相応しいのは、教義と知恵をともなうからで、衆生たちに真実智を開き、説かれたものと考察されたものに入るようになるから。<sup>(51)</sup>

[23] 経に、「また薬王よ」と言うものから「とても近づいていることを知るべきである」と言うまでには、<sup>(52)</sup> この法に依ってから法師が功德をもつものになることが説かれており、菩提に仕え、正しい行に励むことと、大菩提を成立させるようになることが説かれている。<sup>(53)</sup>

[24] 経に、「それは何故かと言うのならば」と言うものから「近くにいるものになる」と言

うまでには、この法を聞くことで正しい行に励む原因が説かれており、見と、聞と、読と、誦と、書と、受持と、供養である。それらも譬喩と、意味と、まとめとの三つである。また、見と思と修の智慧が何れかの相応するものに合わせられる。<sup>(55)</sup>

[25] 経に、「このように、例えば、薬王よ」と言うものから『『この水は近い』と思う』と言うまでには、譬喩が説かれ、弟子が出家を求め、輪廻にとどまり、真実の道を求めるのである。また注釈からも、水は如来の自性である。「掘る」とは、真実の智慧を先に放つことによる身と口と意の三業による精進である。大地が干涸びるのを見ることは、二乗の説を未了義と解説したものと合わせられる。「大地を湿らすのを見る」とは、智慧の完成である大乘を説いたものと結合して、「無上菩提と近い」と言う意味である。注釈からも、この経を受持するその人は如来の自性の水と結合するので「無上菩提と近い」と言う意味である。<sup>(57)</sup>

[26] 経に、「そのように薬王よ」と言うものから「無上等正覚が生じる」と言うまでには、これにより譬喩と意味を合わせている。三慧と十法行の何れかの相応するものが合わされる。<sup>(59)</sup>

[27] 経に、「それは何故かと言えよ」と言うものから「秘密の場所を解説する」と言うまでには、<sup>(60)</sup>これにより理由を示しており、大菩提のこの法は原因をともない、結果をともない、近くの原因をともない、遠くの原因をともない、聖教と教義と行と結果をともない、知恵の特徴と、知恵の自性と、5種の知恵のすべてもこの経に出ており、この経から獲得するのである。柔軟な最高の言葉を注釈は、未了義と了義を注釈している。<sup>(61)</sup>

[28] 経に、「薬王よ、ある菩薩が」と言うものから「正しく示すならば」と言うまでには、法のとおり解説する在り方が説かれており、それにも解説の在り方と、お言葉のとおり聞くことで如来が護ることである。最初の言葉にも、問いと解説とまとめで、これは問いである。<sup>(63)</sup>

[29] 経に、「薬王よ、その菩薩が」と言うものから、「正しく解説する」と言うまでのこれが、<sup>(64)</sup>説かれている。<sup>(65)</sup>

[30] 経に、「薬王よ」と言うものから「この法門を四衆に正しく説かれる」と言うまでには、<sup>(66)</sup>実際に説かれたもので、慈愛と悲心を身体と心に常に備えているので、場所のように見られる。また、大乘そのものが究極の場所そのものである。寂静と、温和と、忍と、慈愛により身体を美しくし、その目的により外道の害により捏ねられないので、服のように見られる。法を空性と説いたものも、諸経にも「四禅は座で」と述べられ、空性と無相にとどまること自身も座のように見られる。<sup>(67)</sup>

[31] 経に、「菩薩は弱くない心で」と言うものから「正しく解説するべきである」と言うまでは、<sup>(68)</sup>第3のまとめである。<sup>(69)</sup>

[32] 経に、「薬王よ、私は世間で」と言うものから「読誦してから再び説くであろう」と言うまでには、<sup>(70)</sup>この言葉に従えば如来も続いて護り、聞に入り、見ることを忘れさせないことである。変化による変化をまとめて、法を示している。<sup>(71)</sup>

[33] 経に、「世尊はその時に」と言うものから「信はとても得難い」と言うまでには、18偈<sup>(72)</sup>を3つに分け、最初の1偈により信解し難いことと宣伝に適さないことが説かれており、4偈により法身と舍利への供養により菩提に近づくことが説かれ、13偈により法を解説する在り方が説かれており、これが最初である。<sup>(73)</sup><sup>(74)</sup>

[34] 経に、「例えばある者が水を求め」と言うものから「ここから水も遠くはない」と言うまでには、この4偈により法身が舍利に変化したものに敬礼をなすことで菩提に近づくことが説かれており、譬喩と意味のいずれかがうまく合わせられている。<sup>(75)</sup><sup>(76)</sup>

[35] 経に、「そのようにそれらは遠い」と言うものから『「水と火」と言われるように」と言うまでが、<sup>(77)</sup>合わされる。<sup>(78)</sup>

[36] 経に、「衆生らに」と言うものから「供養をなす」と言うまでには、この13偈により法を解説する在り方が説かれており、そこで11偈により在り方そのものが説かれ、2偈により聞くことと解説が説かれている。<sup>(79)</sup><sup>(80)</sup>

[37] 経に、「衆会にも」と言うものから「仏を見る」と言うまでには、<sup>(81)</sup>如来が随順することが説かれており、1偈により忍の行が説かれ、3偈により他者の変化による供養と衆会になすことが説かれ、1偈により守護し護られることが説かれ、2偈により身体が明らかに説くことと、所縁を記憶させることが説かれ、1偈により功德をとまなうことを明らかに示すことが説かれ、1偈により八衆が法を聞くことが説かれ、それらは何れかの相応するものと合わせられる。<sup>(82)</sup>

## 注

- (1) 「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』14、2013、pp. 1-22、  
「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』19、2014、pp. 35-58、「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」松村壽巖先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林、2014「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』6、2014。なお、付録「漢文テキスト「法師品」の科文」は研究協力者金炳坤氏によるものである。
- (2) 806c25: 三門分別一來意二釋名三解妨
- (3) 806c25-807b11: 來意有三一者上來最初一品序述因由次有八品名爲正宗前引信解品云今此經中唯說一乘此品又云開方便門顯真實相即以一乘正爲經宗逗二乘者不定姓又并授記訖後十九品名爲流通流通此經非正逗二乘退大心者更無開權顯實正說一乘之處雖此品及持品漸有八部比丘尼等授記因言總記非更說一乘進令修學而與記故皆是流通流通之中分之爲三初之四品讚重流通讚法讚人可尊可重令生喜仰次之七品學行流通學弘此經正行助行令無傷毀後之八品付受流通示相付囑壽命行故亦即三周說流通也問餘經流通文少義略今此經內因何廣哉答此品下云我所說經無量千億其中此經最難信解諸佛祕要常自守護從昔已來未曾顯說義旨深遠生信者少故此流通多於餘經又化大機易可成熟化迴心類稍難信解故多流種種勸勵初之四品讚重流通中初三品讚重後持品流通初三品中法師一品顯於此經若人若法俱可尊重可軌可模寶塔一品顯法可重說此經處塔涌聞法天授一品雖亦明法意明能弘經人其人可重爲重法故於其所不恪軀命以身爲床其持一品既囑此三讚重義廣遂願弘通故此四品名讚重流通餘二流通至文當釋此乃最初品之來意二者說十九品名爲正宗初二品明一乘境中分二上來八品正明權實三根得

記次下四品歎人美法勸募持行科判四品不異流通故此品來三者論中有七喻三平等十無上第十示現勝妙力無上故餘殘脩多羅說即是論云已下示二種力一法力二修行力法力有五一證二信三供養四聞法五讀誦持說初四俱彌勒品即分別功德品及隨喜功德品是俱告彌勒故後一常精進品即法師功德品是告常精進故修行力有七一持力二說力三行苦行力四教化衆生行苦行力五護衆生諸難力六功德勝力七護法力持力有三品法師安樂行持品初法師品總明能持所持人之與法次安樂行明持經者所修行法後持品明能持者故三皆名持力上辨權實正逗二乘之機未說能持所持可尊可重今明此義故此品來

- (4) 807b11-20: 釋名者可軌可持名之爲法可習可範目之爲師此教可軌此理可持雙名爲法此法可習名爲法師故涅槃云諸佛所師所謂法也遺教經言波羅提木又是汝大師此品之中讚經可重法即是師故名法師此法爲法師能學法者可爲模範訓匠群物有法之師名爲法師此人法師此品廣明名法師品下雙說法及學者並名法師義通爲勝ただし、『涅槃經』『遺教經論』の引用を欠く。
- (5) 807b20-c2: 釋妨難者問爲佛前佛後弘持此者並名法師爲但減後答俱名法師此中多以減後名爲法師其現在得弟子之稱然現得記此中亦說名法師故又以現在受持者易略而不說減後持者甚爲難故所以獨得法師之名又現習學者名爲弟子其八部等亦名法師問持品亦持此經又亦可軌何故此品獨名法師答雖標總稱即是別名無別能故餘品更有別義可名況於此中雙歎人法俱可師故又持品現在說法名持此說減後勸歎勝能名法師品問此品亦有授記何故不名授記品答以少略故從多爲品
- (6) 前稿と同じように、『法華經』の引用箇所に対して、梵(ケルン)、藏(中村瑞隆)、漢(鳩摩羅什訳、『大正新脩大藏經』)の該当箇所をあげておく。  
Skt. 224.1-7; Tib. 224.1-8; Chin. 30b29-c7.
- (7) 807c3-16: 【1】 經爾時世尊至三菩提 贊曰此品之中大文分二初一段長行及頌明人法師後一段長行及頌明法法師初文有二初明對佛現前法師後明不對佛前法師此初也以藥王久持此經燃身供養故呼藥王名因藥王告八萬者意告彼授彼記故所記衆中有八部四衆三乘類別辨中邊論有十法行於一一行皆有四行一自作二勸他三讚歎四慶慰今隨喜者即是讚歎舉一例餘由小善根得菩提者只如日光初照即有去暗之功智量創暉遂有斷癡之勢亦如雲霞始布有資萬卉之能慈悲肇興帶蔭群生之氣故也隨喜一句當得菩提信學此經定證何惑  
ただし、後半部分の解説は略されており、『弁中辺論』のタイトルも言及されない。
- (8) Skt. 224.8-10; Tib. 224.8-10; Chin. 30c7-9.
- (9) 807c17-22: 【2】 經佛告藥王至三菩提記 贊曰下明不對佛前法師有二初明聞已傍隨喜者後明正行六種法師此初也正樂聽聞功德無量今但舉一聞隨喜者例餘自作勸他慶慰功德何窮又上解初學法師下解久學法師大菩薩故
- (10) Skt. 224.10-225.8; Tib. 225.1-8; Chin. 30c9-13.
- (11) 807c23-808a13: 【3】 經若復有人至合掌恭敬 贊曰下明正行六種法師有二初明正行六種法師悲願來此後我減度後能竊爲一人說法華經下明六種法師可尊可種初中復二初明於一句偈法行後何況盡能受持下明於多法行初中復二初標行六行者於諸佛所成就悲願生此人間後若有人問何等衆生下顯是勝因來世作佛初中復二初明六種法師後明悲願來生此初也六法師者一受持二讀三誦四解說五書寫六供養此明初五法師於經一偈行後一法師行供養行於經一偈及於一卷皆行供養種種下財供養也始從敬視如佛乃至合掌恭敬合有十三其尊重敬視如佛意業合掌恭敬身業二種內財前隨喜語業餘是外財十法行者謂書寫供養施他聽聞披讀受持正開演誦諷及思修此舉易行且說六種其餘四種施他聽聞思惟修習應皆行之難故不說於經卷云供養餘五於一偈者互影彰故輕重異故易難別故
- (12) Skt. 225.8-15; Tib. 225.8-15; Chin. 30c15-17.
- (13) 808a16-17: 【5】 經藥王若有人問至必得作佛 贊曰下顯是勝因來世作佛有二初標後釋此初也  
この前の句(Chin. 30c13-15)を欠く。  
808a14-15: 【4】 經藥王當知至生此人間 贊曰此明悲願來生此間計位觀因不應來故
- (14) Skt. 226.1-6; Tib. 226.1-6; Chin. 30c17-21.
- (15) 808a18-21: 【6】 經何以故至而供養之 贊曰下釋有二初顯人尊可爲供養後顯位高悲願生此此初也瞻視也奉敬



也深契佛心妙達理由是勝因當得成佛利益大故

(16) Skt. 226.6-9; Tib. 226.6-9; Chin. 30c21-26.

(17) 808a22-27: 【7】 經當知此人至妙法華經 贊曰此顯位高悲願生此能說此經是聖者故不爾云何名大菩薩或即凡夫久修學者簡異二乘及初學者名大菩薩菩薩名通二乘人有及初學故或成就發心菩提當得勝果已成因故能說是經

(18) 808a28-b9: 【8】 經何況盡能至廣演此經 贊曰此明於多法行捨淨業果淨土天上及上二界而不往生此處故智度論云不退菩薩深愛法故聞則深心身毛皆堅念佛慈悲則惻愴泣淚若聞深法則大歡喜譬如軍敗怖懼倒地悶絕死者親族見之欲知活者以杖鞭之則起隱軫不起隱軫即知不活菩薩亦爾若聞說佛功德妙理歡喜毛豎色異悲泣當知此輩必得菩提異此聞經都無異相當知此輩無菩提分般若論云福不趣菩提二能趣菩提何況於此盡能受持非大菩薩無是哀愍

ただし、經文の引用はなく、前項に続けて注釈が行われており、『大智度論』『金剛般若波羅蜜經論』のタイトルへの言及はなく、引用も短縮したものである。

(19) Skt. 227.1-3; Tib. 227.1-4; Chin. 30c26-29.

(20) 808b10-19: 【9】 經若是善男子至廣為人說 贊曰下明六種法師可尊可重文分爲二初明五可尊後釋所以五可尊者一說者爲佛使二毀者罪過佛三讀誦佛莊嚴四在處應讚禮五應四事供養此初也三業順佛故成佛使等使者意業遣者語業者身業又傳佛教名使用佛語名遣同佛行名事世尊三業所爲所作皆以此法利衆生故竊說一句當同佛業公然多說理偈佛行

(21) Skt. 227.4-7; Tib. 227.5-7; Chin. 30c29-31a3.

(22) 808b20-c9: 【10】 經樂王若有惡人至其罪甚重 贊曰二毀者罪過佛惡世損多故大集經云毀罵犯戒比丘過出萬億佛身血大般若勝天王會云若殺大千界微塵數佛得罪尚輕毀謗此經罪過於彼永入地獄無有出期今毀讀誦者亦復如是若損害佛不損二利行佛不生惱故損讀誦者損二利之行生煩惱故又雖毀佛佛無愛憎不廢說經利益彌廣若毀讀誦者爲有怨親廢其修習又罵佛甚爲難罵讀誦者甚爲易誦其勿爾故作是說又佛在時衆生根勝雖有罵佛不退善心雖自損深損他淺故佛無已後衆生垢重毀持經者一切聞已多退道心自他損重故作是說華手經云若人壞亂菩提心者乃爲毀滅一切衆生大法光明罪過五無間五無間逆不毀壞一切佛法故毀菩提心者則爲毀壞一切佛法又佛滅後依法讀誦甚爲難有能爲惡世衆生善友故毀罵者罪過罵佛皆音茲此反毀作詛玉篇口毀曰咎也

ただし、『大集經』『般若經』『勝天王會』の引用と『華手經』のタイトルへの言及を欠く。

(23) Skt. 227.7-9; Tib. 227.7-10; Chin. 31a3-5.

(24) 漢文は、『華嚴經』とする。

(25) 808c10-26: 【11】 經樂王至肩所荷擔 贊曰三讀誦佛莊嚴具佛衆德 故讀誦此經當具相好等一切莊嚴故華嚴經說菩薩有十種莊嚴一大慈莊嚴救護一切衆生故二大悲莊嚴堪忍一切故三大願莊嚴所可發願悉究竟故四迴向莊嚴建立一切諸佛功德妙莊嚴故五功德莊嚴饒益一切衆生故六波羅蜜莊嚴度脫一切衆生故七智慧莊嚴除滅一切衆生煩惱愚癡闇故八方便莊嚴出生善門諸善根故九一切智心堅固不亂莊嚴不樂異乘故十決定莊嚴於正法中滅疑惑故勝鬘經說攝受正法善男子荷負重任不但持經者能擔四生亦爲佛肩之所荷擔佛所重故稱佛心故爲有二義一作二被上來被義言作義者即是自肩亦擔如來肩所荷擔大菩提也即爲荷擔阿耨菩提故荷音胡歌反玉篇又何可反擔也揭也負也

ただし、十莊嚴の各項目の説明と、次の經文（Chin. 31a3-9）の解説を欠く。

808c27-30: 【12】 經其所至方至應以奉獻 贊曰四在處應讚禮人尊處勝故五應四事供養眞實福田故堪受妙供故饌飲食也具食也或爲撰字

(26) Skt. 227.9-228.2; Tib. 227.10-228.2; Chin. 31a5-11.

(27) 809a1-6: 【13】 經所以者何至三菩提故 贊曰此釋所以由此法華最深密故不付阿難唯付樂王等極秘密故譬如用毒爲藥大醫所堪小師不能故付菩薩不付聲聞化聲聞故說此時須與得聞當得究竟大菩提也言契眞故自得果故令他得故

- (28) Skt. 228.3-7; Tib. 228.3-7; Chin. 31a11-16.
- (29) 809a7-14: 【14】 經爾時世尊至并供養持者 贊曰下十六頌分三初二頌總叙法師可尊應可供養之所由次十三頌頌前法師之德後一頌結成法勝故人可尊此初分二初二頌得任運智即真智性二空真理後一頌得真智相一切種即後得智及智慧即根本智分爲二故勸自受持并供持者於自然智但勸供養明自受持得之何惑
- (30) Skt. 228.7-13; Tib. 228.9-12; Chin. 31a17-22.
- (31) 809a15-18: 【15】 經若有能受持至廣說無上法 贊曰下十三頌頌前法師之德中分二初二頌歎法師勝後十頌頌可尊可重此初爲三初頌佛使次頌捨淨土後頌隨願自在
- (32) Skt. 228.14-15; Tib. 228.14-15; Chin. 31a23-24.
- (33) 809a19-27: 【16】 經應以天華香至供養說法者 贊曰下十頌頌可尊可重分二初二頌正歎法師可尊可重後六頌较量罪福勸生尊重初四頌爲二一頌重說法三頌重受持此初也以說法者自然必得勝妙果報故略讚之如契經說若有戒足雖羸劣而能辨說利多人如佛大師應供養愛彼善說故相似俱舍亦云父母・病法師・最後身菩薩・設非得聖者施果亦無量  
ただし、『契經』と『俱舍論』の引用を欠く。
- (34) Skt. 229.1-6; Tib. 229.1-6; Chin. 31a25-b1.
- (35) 809a28-30: 【17】 經吾滅後惡世至行於如來事 贊曰此三頌重受持一頌勸敬一頌供養一頌佛使演說讀誦等皆是受持
- (36) Skt. 229.7-10; Tib. 229.7-10; Chin. 31b2-5.
- (37) 809b1-3: 【18】 經經若於一劫中至其罪復過彼 贊曰下六頌较量罪福勸生尊重爲二初二頌较量罪後四頌较量福此初也
- (38) Skt. 229.11-13; Tib. 229.12-13; Chin. 31b6-9.
- (39) 809b4-7: 【19】 經有人求佛道至其福復過彼 贊曰下四頌分二初二頌對佛较量後二頌聞法较量供養此初也讚佛易故心輕利少讚持者難故心重利多自他有多少故如前准解
- (40) Skt. 230.1-4; Tib. 229.13-230.4; Chin. 31b10-13.
- (41) 809b8-10: 【20】 經於八十億劫至我今獲大利 贊曰此以聞法较量供養財供法供有優劣故法供養者謂聞法故
- (42) Skt. 230.5-6; Tib. 230.5-6; Chin. 31b14-15. 『大正新脩大藏經』では、偈頌のスタイルで記しているが、対応する梵藏は散文である。
- (43) 809b11-12: 【21】 經藥王今告汝至法華最第一 贊曰第三大段顯法勝故人成可尊
- (44) Skt. 230.6-7; Tib. 230.6-7; Chin. 31b16-18.
- (45) 809b13-23: 【22】 經爾時佛復告至難信難解 贊曰下第二段明法法師中初長行後偈頌長行有三初明法難信解勿妄宣傳次在在處處若說若讀者下明是法身舍利應可供養後若有善男子善女人如來滅後欲爲四衆下明說法儀則初中復二初明法法師深妙後明由此人法師復成勝德初中復二初法難信解後勿妄宣傳此初也三世經中此難信解令捨權以就實無生而有生故知難信道理幽玄迂迴而方證故知難解
- (46) Skt. 230.7-10; Tib. 230.7-10; Chin. 31b18-21.
- (47) 809b24-28: 【23】 經藥王此經至沉滅度後 贊曰下勿忘宣傳授與人已上誠之勿傳諸佛已下釋其所以佛常自守未曾顯說今方說之佛在自說聲聞之中猶有怨嫉增上慢者尚起避席況佛滅後謗不信
- (48) Skt. 230.11-231.6; Tib. 230.11-231.4; Chin. 31b21-26.
- (49) 809b29-c5: 【24】 經藥王當知至手摩其頭 贊曰此明由法其人法師復成勝德有七勝德一佛衣覆柔和忍辱具慚愧故爲佛慈悲之所覆故二佛護念由此根熟佛善護念諸菩薩故三有大信四有志願以欲勝解而爲自體五有善根六佛共宿同住慈悲心思空勝義舍故七佛手摩頭佛教被心佛所記別佛攝受故
- (50) Skt. 231.7-232.3; Tib. 231.5-232.4; Chin. 31b26-c1.
- (51) 809c6-20: 【25】 經藥王在在處處至尊重讚歎 贊曰下明是法身舍利應可供養有二初明是法身舍利後明用此人

成法師亦爲勝德初中有二初標後釋標中有**五處**一說處二讀處三誦處四書處五經卷住處十法行中供養施他聽聞受持思量修習不離此四處故所以者何下釋中有二初顯是全身舍利後應爲供養明理・智二皆圓滿故即是具足法身報身由此返照開示悟入佛之知見通取菩提涅槃理・事雙盡矣是以佛教造像書法身舍利安於像中云諸法從因生如來說是因彼法從緣滅大沙門所說是爲法身舍利故**無量義經**云亦名堅固舍利准**金光明經**如如智智名法身故經有處即有全身

ただし、「五處」の解説と『無量義經』『金光明經』の引用を欠く。

- (52) Skt. 232.4-5; Tib. 232.4-6; Chin. 31c1-3.
- (53) 809c21-25: **[26]** 經若有人至三菩提 贊曰下明由此人成法身亦爲勝德有**四**一禮供此塔得近菩提二見聞此經善行勝道三見聞此經得近正覺四聞經驚疑新學具慢此初也趣向法身故此近初發心菩提  
ただし、漢文は功德を四とするが、チベット語訳は3項目しか訳されない。
- (54) Skt. 232.5-10; Tib. 232.6-10; Chin. 31c3-6.
- (55) 809c26-29: **[27]** 經藥王多人至菩薩之道 贊曰二見聞此經善行勝道是正因故已入劫數名行善行文有七行一見二聞三讀四誦五書六持七供養故知說思修等眞爲善行  
ただし、次の經文（Chin. 31c6-9）の解説の訳を欠く。  
809c30-810a2: **[28]** 經其有衆生至三菩提 贊曰三見聞此經得近初地正覺有三一法二喻三合此初也若聞是聞慧信解思慧受持修慧
- (56) Skt. 233.1-6; Tib. 233.1-5; Chin. 31c9-12.
- (57) 810a3-19: **[29]** 經藥王譬如至知水必近 贊曰此喻也有人喻學出要者渴乏喻在生死無正法水須水者論云喻佛性水成大菩提故即教所詮之理性初地菩提須規求也於高原者廣平曰原喻佛正法覆四生羅萬像出過衆道之先難可登陟說爲高原即以生死外道之教名平川平川之中有高原故穿鑿求之者鑿者鑿也穿也以妙慧爲先三業爲作具簡擇推尋求菩提故猶見乾土者即昔日權二乘教跡全無大乘之相名知水尚遠施功不已者二利不息故轉見濕土者謂逢般若空教大乘有菩提之勢與濕土名遂漸至泥者喻聞此經教知水必近者論云受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故近於所詮佛智慧也即顯二乘教爲遠大乘教爲近空教爲疎中道教爲親
- (58) Skt. 233.6-11; Tib. 233.5-9; Chin. 31c12-15.
- (59) 810a20-22: **[30]** 經菩薩亦復至三菩提 贊曰下合有二初標後釋此標也聞解習三如次三慧十法行中初八聞慧次一思慧後一修慧
- (60) Skt. 233.11-13; Tib. 233.9-11; Chin. 31c15-19.
- (61) 810a23-b3: **[31]** 經所以者何至而爲開示 贊曰此釋所由大菩提法有因有果有近正因有遠傍因教理行果智性智相五種智慧並屬此經由經得故此經攝故開方便門者即攝遠傍昔說二乘教理行果顯眞實相者攝近正因今說一乘教理行果一切皆盡故並屬此經又深固者深謂妙而難測固謂不可破壞佛所攝受佛所祕藏如王齒印非餘人物故幽遠者大劫修因妙智證故非佛不克無人能到窮眞本源今化菩薩故謂開示  
ただし、次の經文（Chin. 31c19-21）の解説の訳を欠く。  
810b4-7: **[32]** 經藥王若有至增上慢者 贊曰四聞經驚疑新學具慢初學菩薩凡夫聲聞初聞便驚思起疑惑修行怖畏名爲新學及增上慢未入三位
- (62) Skt. 233.13-234.4; Tib. 233.11-234.4; Chin. 31c21-23.
- (63) 810b8-11: **[33]** 經藥王若有至云何應說 贊曰下第三大段明說法儀側有二初教示儀軌後若依我軌儀佛便隨順初文有三一問二示三結此問也
- (64) Skt. 234.4-6; Tib. 234.4-6; Chin. 31c23-25.
- (65) 810b12-13: **[34]** 經是善男子至廣說斯經 贊曰下示有二初標後釋此初也
- (66) Skt. 234.6-11; Tib. 234.6-11; Chin. 31c25-27.
- (67) 810b14-c6: **[35]** 經如來室者至一切法空是 贊曰此釋也恒常安處寢息身心於慈悲故名爲室**維摩**以空爲舍理究

竟處自利舍故此明於事說法利他舍故前第二卷漸次遊行遂到父舍以中道大乘爲舍以中外相形名之爲舍彼是教舍此是行舍亦不相違心行調順堪耐心勞苦名柔和忍辱衣外物不侵故耐怨害安受苦如次配之崇賢善拒惡法三乘通行以慚愧爲上服今說惡人苦境不撓大乘別行故說和忍爲衣亦不相違又柔和之體即慚愧故安身心於空境觀三事以泚然名空爲座維摩以四靜慮爲床彼據智所生依以靜慮定爲床今據智所緣依以法空爲床亦不相違大慈悲有觀也衣座二空觀也謂生空法空如次依十住毘婆沙說法處師子座有四法一先應恭敬禮拜大眾然後升座二衆有女人應觀不淨三威儀瞻視有大人相顏色和悅人皆信受不說外道經書心無怯畏四於惡言問難當行忍辱復有四法一不輕自身二不輕聽者三不輕所說四不爲利養對法顯揚瑜伽等中皆有問難說法等相應廣如彼  
ただし、『維摩經』『十住毘婆沙論』への言及を欠く。

(68) Skt. 234.11-235.1; Tib. 234.11-12; Chin. 31c27-28.

(69) 810c7: 【36】 經安住是中至是法華經 贊曰三結也

(70) Skt. 235.1-7; Tib. 235.1-5; Chin. 31c28-32a4.

(71) 810c8-11: 【37】 經樂王我於至聽其說法 贊曰下若依我軌儀佛便隨順有三一令聽二得見三令不忘念此初有三一令化人集衆二化四衆令聽三令八部往聽

ただし、次の経文 (Chin. 32a4-6) の解説の訳を欠く。

810c12-16: 【38】 經我雖在異國至令得具足 贊曰此令得見及不忘念逗音徒闕反逗留也又住也止也作逗音亦有作寶字教能寶釋義故逗音說文大句反又土豆反今從徒闕反有作讀不知所從

(72) Skt. 235.8-10; Tib. 235.6-8; Chin. 32a6-9.

(73) 漢文は、18偈半を16偈半と2偈に分け、前者を1偈と4偈と11偈半に分けている。

(74) 810c17-22: 【39】 經爾時世尊至信受者亦難 贊曰下十八頌半分二初十六頌半頌前所說後二頌明能說能受二俱益相初文有三初一頌難難信解勿妄宣傳次四頌頌法身舍利中人近菩提後十一頌半頌說法儀軌此初也

(75) Skt. 235.11-16; Tib. 235.9-14; Chin. 32a10-12.

(76) 810c23-26: 【40】 經如人渴須水至決定知近水 贊曰下四頌頌法爲舍利中人近菩提有二一頌半喻二頌半合此初也燥音蘇浩反亦乾也

(77) Skt. 236.1-6; Tib. 236.1-6; Chin. 32a13-17.

(78) 810c26-27: 【41】 經樂王汝當知至近於佛智慧 贊曰此二頌半合也

(79) Skt. 236.14-237.4; Tib. 236.14-237.4; Chin. 32a18-22.

(80) 810c28-31: 【42】 經若人說此經至處此爲說法 贊曰下十一頌半說法儀軌中有二初二頌半頌儀軌後九頌頌佛隨順此初有二一頌半標教一頌釋之

(81) Skt. 237.4-238.4; Tib. 237.4-238.4; Chin. 32a23-b1.

(82) 811a1-11: 【43】 經若說此經時至集之令聽法 贊曰下九頌頌佛隨順分六初一頌明行忍行次三頌明我在餘國令化四衆供養聽法一頌爲作衛護二頌現身令憶念一頌具德方見佛一頌令八部聽法此初二也

ただし、次の経文 (Chin. 32b2-11, 12-15) の解説の訳を欠く。

811a6-8: 【44】 經若人欲加害至爲作聽法衆 贊曰一衛護二令憶念寂寞者空無貌一見佛具是德者具是忍辱寂處讀誦一令八部聽

811a9-11: 【45】 經是人樂說法至得見恒沙佛 贊曰此第二大段明能說能受二俱益相初頌能說者益後頌能聽者益罪障也礙止也

## 付録「漢文テキスト「法師品」の科文」

頁：【經】	科文	名目（偈頌数）	引用經論（間接引用*）
806c25	0	三門分別	
806c25	0-1	來意	
	0-1-1-1	上來最初一品序述因由	
	0-1-1-2	次有八品名為正宗	『信解品』
	0-1-1-3	後十九品名為流通	
	0-1-1-3-1	初之四品讚重流通	
	0-1-1-3-1-1	初三品讚重	
	0-1-1-3-1-1-1	法師一品……可軌可模	
	0-1-1-3-1-1-2	宝塔一品……塔涌闍法	
	0-1-1-3-1-1-3	天授一品……以身為床	
	0-1-1-3-1-2	後持品流通	
	0-1-1-3-2	次之七品學行流通	
	0-1-1-3-3	後之八品付受流通	
	0-1-1-3-A	問答①	
	0-1-2	十九品名為正宗	
	0-1-2-1	初十二品明一乘境	
	0-1-2-1-1	上來八品正明權實三根得記	
	0-1-2-1-2	次下四品歎人美法勸募持行	
	0-1-3	論中有七喻・三平等・十無上……即是	『法華論』
	0-1-3-1	法力〔法力有五〕	
	0-1-3-2	修行力〔修行力有七〕	
	0-1-3-2-1	持力有三品	
807b11	0-2	積名	『涅槃經』『遺教經論』
807b20	0-3	解妨〔/積妨難〕	
	0-3-1	問答①	
	0-3-2	問答②	
	0-3-3	問答③	
807c3:【1】	1	明人法師〔初一段長行及頌〕	
	1-1	明對仏現前法師	『弁中辺論*』
807c17:【2】	1-2	明不對仏前法師	
	1-2-1	明聞已傍隨喜者	
807c23:【3】	1-2-2	明正行六種法師	
	1-2-2-1	明正行六種法師悲願來此	
	1-2-2-1-1	明於一句偈法行	
	1-2-2-1-1-1	標行六行者於諸仏所成就悲願生此人間	
	1-2-2-1-1-1-1	明六種法師〔六法師・十法行〕	
808a14:【4】	1-2-2-1-1-1-2	明悲願來生	
808a16:【5】	1-2-2-1-1-2	顯是勝因來世作仏	
	1-2-2-1-1-2-1	標	
808a18:【6】	1-2-2-1-1-2-2	積	
	1-2-2-1-1-2-2-1	顯人尊可為供養	
808a22:【7】	1-2-2-1-1-2-2-2	顯位高悲願生此	
808a28:【8】	1-2-2-1-2	明於多法行	『大智度論』『金剛般若波羅蜜經論』

808b10: 【9】	1-2-2-2	明六種法師可尊可種	
	1-2-2-2-1	明五可尊	
	1-2-2-2-1-1	一說者為仏使	
808b20: 【10】	1-2-2-2-1-2	二毀者罪過仏	『大集經』『大般若經』「勝天王会」『華手經』
808c10: 【11】	1-2-2-2-1-3	三誦誦仏莊嚴	『華嚴經*』『勝鬘經*』
808c27: 【12】	1-2-2-2-1-4	四在処応讚礼	
	1-2-2-2-1-5	五応四事供養	
809a1: 【13】	1-2-2-2-2	釈所以	
809a7: 【14】	1-A	[下十六頌]	
	1-A-1	總叙法師可尊応可供養之所由 (2)	
	1-A-1-1	得任運智即真智性二空真理 (1)	
	1-A-1-2	結成法勝故人可尊 (1)	
809a15: 【15】	1-A-2	頌前法師之徳 (13)	
	1-A-2-1	歎法師勝 (3)	
	1-A-2-1-1	頌仏使	
	1-A-2-1-2	頌捨浄土	
	1-A-2-1-3	頌随願自在	
809a19: 【16】	1-A-2-2	頌可尊可重 (10)	
	1-A-2-2-1	正歎法師可尊可重 (4)	
	1-A-2-2-1-1	重説法 (1)	『契經』『俱舍論』
809a28: 【17】	1-A-2-2-1-2	重受持 (3)	
	1-A-2-2-1-2-1	勸敬 (1)	
	1-A-2-2-1-2-2	供養 (1)	
	1-A-2-2-1-2-3	仏使 (1)	
809b1: 【18】	1-A-2-2-2	校量罪福勸生尊重 (6)	
	1-A-2-2-2-1	校量罪 (2)	
809b4: 【19】	1-A-2-2-2-2	校量福 (4)	
	1-A-2-2-2-2-1	対仏校量 (2)	
809b8: 【20】	1-A-2-2-2-2-2	聞法校量供養 (2)	
809b11: 【21】	1-A-3	結成法勝故人可尊 (1)	
809b13: 【22】	2	明法法師〔後一段長行及頌〕	
	2-1	長行	
	2-1-1	明法難信解勿妄宣伝	
	2-1-1-1	明法法師深妙	
	2-1-1-1-1	法難信解	
809b24: 【23】	2-1-1-1-2	勿妄宣伝	
809b29: 【24】	2-1-1-2	明由此人法師復成勝徳〔七勝徳〕	
809c6: 【25】	2-1-2	明是法身舍利応可供養	
	2-1-2-1	明是法身舍利	
	2-1-2-1-1	標〔五処〕	
	2-1-2-1-2	釈	
	2-1-2-1-2-1	顯是全身舍利	
	2-1-2-1-2-2	応為供養	『無量義經』『金光明經*』
809c21: 【26】	2-1-2-2	明用〔/由〕此人成法師〔/身〕亦為勝徳	
	2-1-2-2-1	一礼供此塔得近菩提	
809c26: 【27】	2-1-2-2-2	二見聞此經善行勝道〔文有七行〕	

809c30: 【28】	2-1-2-2-3	三見聞此經得近正覺	
	2-1-2-2-3-1	法	
810a3: 【29】	2-1-2-2-3-2	喩	『法華論』
810a20: 【30】	2-1-2-2-3-3	合	
	2-1-2-2-3-3-1	標	
810a23: 【31】	2-1-2-2-3-3-2	釈	
810b4: 【32】	2-1-2-2-4	四聞經驚疑新學具慢	
810b8: 【33】	2-1-3	明說法儀則	
	2-1-3-1	教示儀軌	
	2-1-3-1-1	問	
810b12: 【34】	2-1-3-1-2	示	
	2-1-3-1-2-1	標	
810b14: 【35】	2-1-3-1-2-2	釈	『維摩經*』『十住毘婆沙論*』
810c7: 【36】	2-1-3-1-3	結	
810c8: 【37】	2-1-3-2	若依我軌儀仏便隨順	
	2-1-3-2-1	令聽	
	2-1-3-2-1-1	令化人集衆	
	2-1-3-2-1-2	化四衆令聽	
	2-1-3-2-1-3	令八部往聽	
810c12: 【38】	2-1-3-2-2	得見	
	2-1-3-2-3	令不忘念	
810c17: 【39】	2-2	偈頌〔下十八頌半〕	
	2-2-1	頌前所說（16.5）	
	2-2-1-1	頌難信解勿妄宣伝（1）	
810c23: 【40】	2-2-1-2	頌法身舍利中人近菩提（4）	
	2-2-1-2-1	喩（1.5）	
810c26: 【41】	2-2-1-2-2	合（2.5）	
810c28: 【42】	2-2-1-3	頌說法儀軌（11.5）	
	2-2-1-3-1	頌儀軌（2.5）	
	2-2-1-3-1-1	標教（1.5）	
	2-2-1-3-1-2	釈之（1）	
811a1: 【43】	2-2-1-3-2	頌仏隨順（9）	
	2-2-1-3-2-1	明行忍行（1）	
	2-2-1-3-2-2	明我在余國令化四衆供養聽法（3）	
811a6: 【44】	2-2-1-3-2-3	為作衛護（1）	
	2-2-1-3-2-4	現身令憶念（2）	
	2-2-1-3-2-5	具德方見仏（1）	
	2-2-1-3-2-6	令八部聽法（1）	
811a9: 【45】	2-2-2	明能說能受二俱益相（2）	
	2-2-2-1	能說者益	
	2-2-2-2	能聽者益	

## キーワード

『妙法蓮華經玄贊』、『法華經』、『法師品』、基、慈恩大師